
「筆の里くまの会議」の当時の会員の方にお話を伺いました

当時、熊野町に大型店舗が進出するといった話もあり、町内小売業への影響などによる地域経済の不安定化や町の活力低下といった危機意識から商工会青年部によって話し合いの場が持たれたのが、「筆の里くまの会議」発足の契機でした。

会員は商工会青年部のメンバーが主体でしたが、部員以外の若者も参加できる開かれた議論の場でした。20代後半から30代後半の年齢層が中心の若い集団で、学生も参加していました。

多様に交わされた議論は、やがて、「大型店舗の進出に反対してもしかたがない。自分たちの商売を守るためにも、経済が活性化するようなまちづくりに取組もう」といった建設的な意見へと収束し、「美術館や博物館を造ってはどうか」といった、まちづくり手法としてのアイデアが提案されたようです。

そうした時に私にも入会の誘いがあり、活動に加わることになりました。やがて、「ただ単に建築物を造ってもどうにもならない」といった現実的な課題に向き合うなかで次第に議論は煮詰まってゆきました。

その後の議論において「まちの活性化策を講じるには、まちの対外的なPRが必要ではないか」といった具体的な手段や手法についての意見が交わされるなか、「まちをPRするには、まちの資源を知ることが必要。そこから始めてはどうか」との意見に賛同が集まり、まちを隈なく調査する活動を展開してゆくことになりました。

くまの会議には町職員も加わっており、行政側の意向を踏まえた検討が可能でした。会合は回を重ねるにつれて人数が増えてゆき、多い時には50人近くが集まり、会場に入りきらないといったこともありました。酒が入ることもなく、常に勢いのある熱い議論がなされ、会場は“ムンムン”と熱気に満ちていました。午前に加えて夕刻にもといった具合に、1週間に10回ぐらい集まることもあり、時には深夜に及ぶこともありました。他人の意見に対しては、社交辞令に終始した感想や他人の意見を茶化すような発言はなく、真摯に本音をぶつけあい、それを楽しむかのごとく議論は展開してゆきました。

また、多彩なメンバーが揃っていたため、図面をひく人、議論内容を文章化する人、パソコンに入力する人、異なる視点を提供する人、学生の立場での意見を述べる人といった具合に、役割分担が自然にできあがり、円滑に会合が運営されていま

した。

そうしたメンバーにより、1年目は町の資源を整理するという方針のもと、4つの部会に分かれて各部会がそれぞれに研究成果をまとめました。そのため内容は統一感に欠け、くまの会議としての意思も不明瞭なものでした。そこで、2年目は町づくりに対しくまの会議としての意思を示すことに重きを置いた活動としました。その頃には会合への参加者は半分ぐらいになっていたと思います。

2年目の報告書「筆の里くまの観光基本構想報告書」は、地域プランナーの中田氏から知恵を頂きながら、現在、筆の里工房を運営する筆の里振興事業団理事長を務める石井氏に議論のまとめと編集を担っていただきました。当時は、町補助事業であることから形ある結果を出さないといけないということもあり、石井氏が牽引する形で成果の形成がなされました。

くまの会議の活動には町から補助金が交付され、それを元手に先進地視察や報告書の製本を行いました。部会のうち「デザイン部会」の活動は、くまの会議発足から10年ぐらいは続いたと思います。町の補助金は年を経るごとに額が段階的に縮小されながら数か年は続きましたが、やがて補助金を受けてもその使途に窮する状態となったことから、補助金を辞退するという判断を下し、町の関与からは離れた。

観光振興のシンボルゾーン拠点の建設といった構想を含む報告書作成から数年以内に筆の里工房の建設が現実のものとなったわけで、まるで夢のような出来事でした。ふり返ると、当時は昭和の終わりの頃からの一村一品運動、それに続くふるさと創生1億円事業など、ムラおこしやマチおこしに取り組む全国的な地方創生のブームにわいており、町行政はもとより会員にもその波に乗ろうとする気運や熱気がありました。

このくまの会議に参画したことで、私自身にも大きな変化があったように思います。まちづくりとは何か。それに誰とどのように関わってゆけるのか。そうしたことを、会合での議論の過程や人間関係の広がりの中で改めて考えるようになりました。まちづくりを担う一人の町民としての自覚がより深まり、世界観が広がったと実感しています。この貴重な経験は、私の財産となりました。

真の観光には“もてなしの心”が大切です。受入れる側の姿勢として、まちの優れた資源を知っていただき、人々の心からのもてなしの精神で交流をする。そして、訪

れた人に熊野を好きになっていただき、リピーターやまちの支援者になっていただく。そうした働きかけがあって、初めて意味のある「観光」になってゆくのだと思います。これからつくる施設においても、「観光」という言葉を吟味することが大切ではないでしょうか。

新しい施設では、筆によるものにとどまらず手しごとの創作体験を展開するということです。熊野は筆づくりのまち、技術のまちですから、モノづくりの体験メニューを揃えることは良いことだと思います。

しかし、一気に高尚な「芸術」に飛び、敷居を高めるようなことはすべきではありません。あくまでも、町民が“もてなし”の心をもって楽しく体験交流できる環境となることが大切だと考えるからです。そのためにも、町民がまず施設を知ることが必要ですし、施設も町民が来訪者と接し、楽しく集うような接客の場となるよう工夫が必要です。例えば訪問客の応接に町民が気軽に使うことができるような、自由な空間の提供を実現させてゆく。住民が客を連れてゆきたいと思える、熊野を訪れた人が「行って良かった」と思えるような、そうした自由で身近なもてなしの場であつたらいいですね。

創作体験などのサービスの在り方についても工夫が必要です。モノづくりは自己表現のひとつですから、モノづくりの原点である利用者の主体性に対する視点が重要です。自己表現の楽しさを利用者にかんじていただけるかが、もてなす側に求められる配慮であり、利用者の創作意欲が発露するような支援に気を配ることが大切だと思います。

施設管理面でも、建物や広場の利用制約は極力設けないほうが良いと思います。もちろん、公共施設ですから適切な維持管理のための対応は当然に必要ですが、それらは“めだたない管理”とすべきです。利用者の自己責任を促し、自由な空間を形成する。そうした姿勢がほしいものです。例えば公園の入口に看板で多くの「禁止事項」を列記するといった、利用者の主体性や良心といったものに心を通わせない対応は好ましくないでしょう。

新たな施設がどれだけ認知され、利用されるかは未知数です。この点、設置する側は心配があるでしょうが、こうした自由で楽しく、創造性が発揮できるような空間であれば、その良さは口コミで必ず広がってゆくものです。

そうしたネットワークが築かれるよう、施設運営に携わる人々は日夜知恵を絞り、

アイデアを出し合ってもらいたいです。とかく行政はタテ割りで物事を並列的に置いて思考しがちですが、それぞれが並列的にある要素をどのように作用ないしは共振させ合いながら、ピラミッドの頂点である目的に向かって進んでゆくのか。そうした思考や行動の軸となるものを常に意識して持つておくことが大切だと思います。

運営者には試行錯誤の繰り返しが求められます。試行錯誤をむしろ楽しみながら、魅力的な施設づくりをしてください。期待しています。

この内容は、1989(平成元)年に結成された「筆の里くまの会議」に参画された方へのインタビュー内容を記録したものです。(一部要約をしました。)

日時 令和6年5月20日午後3時から

場所 熊野町役場

主題 「筆の里くまの会議」の思い出と新たな観光交流施設への期待について

発言者 梶山孝之氏(町内在住)

記録者 熊野町総務部産業観光課